

目次（リンクなし）

序説

菜根譚 前集

1 ◎ 棲守道德

2 ◎ 涉世浅点

3 ◎ 君子心事

4 ◎ 勢利紛華

5 ◎ 逆耳之言

6 ◎ 疾風怒雨

7 ◎醃肥辛甘非真味

8 ◎天地寂然

9 ◎独坐觀心

10 ◎恩裡生害

11 ◎藜口莧腸

12 ◎面前的田地

13 ◎涉世安樂法

14 ◎作人無高遠

15 ◎俠氣素心

16 ◎寵利德業

17 ◎退步即進步

18 ◎ 矜字悔字

19 ◎ 完名美節

20 ◎ 有余不尽的意思

21 ◎ 家庭有個真仙

22 ◎ 有道的心体

23 ◎ 攻人之惡

24 ◎ 糞虫腐草

25 ◎ 矜高客氣

26 ◎ 飽後思味

27 ◎ 軒冕之中

28 ◎ 処世不邀功

29 ◎美德高風

30 ◎事窮勢蹙

31 ◎富貴寬厚

32 ◎居卑知危

33 ◎脫凡入聖

34 ◎害心蠱賊

35 ◎人情反覆

36 ◎待小人待君子

37 ◎寧守渾噩

38 ◎降魔降自心

39 ◎教弟子如養閨女

40 ◎ 欲路上事

41 ◎ 念頭濃淡

42 ◎ 彼富我仁

43 ◎ 超達安樂

44 ◎ 学者要收拾精神

45 ◎ 人々有大慈悲

46 ◎ 進德修道

47 ◎ 和氣殺氣

48 ◎ 昭々冥々

49 ◎ 少事多心

50 ◎ 方円寛嚴

51 ◎ 可忘不可忘

52 ◎ 不見己不見人

53 ◎ 人之際遇

54 ◎ 心地乾淨

55 ◎ 富而不足

56 ◎ 不見聖賢

57 ◎ 人心有真文章

58 ◎ 苦心中得悅心

59 ◎ 富貴名譽

60 ◎ 春至時和

61 ◎ 兢業瀟灑

62 ◎真廉無廉名

63 ◎欹器以滿覆

64 ◎名根客氣

65 ◎心体光明

66 ◎無名無位之樂

67 ◎善処是惡根

68 ◎天之機緘

69 ◎燥性、寡恩、凝滯

70 ◎召福之本

71 ◎十語九中、十謀九成

72 ◎暖生寒殺

73 ◎天理人欲

74 ◎一苦一樂

75 ◎心虛心實

76 ◎水清無魚

77 ◎無病是憂

78 ◎一念貪私

79 ◎賊化家人

80 ◎保已成業

81 ◎氣象高曠

82 ◎風來疎竹

83 ◎清能有容

84 ◎ 氣度自風雅

85 ◎ 閒中不放過

86 ◎ 起死回生的関頭

87 ◎ 觀心証道

88 ◎ 靜中靜非真靜

89 ◎ 所舍心俱非

90 ◎ 天薄我以福

91 ◎ 智巧何益

92 ◎ 看人看後半截

93 ◎ 無位公相有爵乞人

94 ◎ 吾身所享所貽

95 ◎君子詐善

96 ◎家庭的型範

97 ◎無欠陷世界

98 ◎澹泊之士、檢飾之人

99 ◎逆境順境

100 ◎富貴叢中

101 ◎人心一真

102 ◎文章極處

103 ◎脫世間韁鎖

104 ◎爽口味、快心事

105 ◎不責小過

106 ◎持身不可輕

107 ◎有生之樂、虛生之憂

108 ◎德怨兩忘

109 ◎老來衰後

110 ◎私恩、新知、榮名、奇節

111 ◎公平正論

112 ◎曲意使人喜

113 ◎父兄骨肉之變

114 ◎纔是個真正英雄

115 ◎千金難結

116 ◎藏巧於拙

117 ◎ 衰颯的景象

118 ◎ 驚奇喜異

119 ◎ 怒火欲水

120 ◎ 偏信自任

121 ◎ 人之短處

122 ◎ 沉々不語之士

123 ◎ 憧々昏昏

124 ◎ 霽日青天、疾風怒雨

125 ◎ 勝私制欲

126 ◎ 無窮意味、無窮受用

127 ◎ 橫逆困窮、一副鑪錘

128 ◎ 吾身一小天地

129 ◎ 精明而渾厚

130 ◎ 群疑獨見

131 ◎ 善人惡人

132 ◎ 青天白日的節義

133 ◎ 便是路人市道

134 ◎ 妍醜潔污為對

135 ◎ 坐煩惱障中

136 ◎ 功過不容少混

137 ◎ 爵位不宜太盛

138 ◎ 惡忌陰、善忌陽

139 ◎德者才之主

140 ◎放一条去路

141 ◎同功則相忌

142 ◎亦是無量功德

143 ◎饑則附、飽則颺

144 ◎君子宜淨拭冷眼

145 ◎德隨量進

146 ◎一燈螢然萬籟無聲

147 ◎反己者尤人者

148 ◎事業銷毀、精神萬古

149 ◎機外機、變外變

150 ◎真懇念頭、円活機趣

151 ◎水不波則自定

152 ◎一念、一言、一事

153 ◎寬之自明

154 ◎德性陶鎔

155 ◎正盛之時、独後之地

156 ◎謹德施恩

157 ◎交市人不如友山翁

158 ◎德者事業之基

159 ◎心者後裔之根

160 ◎可為學問切戒

161 ◎道是公衆物事

162 ◎信人者己則独誠

163 ◎念頭寬厚、念頭忌刻

164 ◎為善不見其益

165 ◎遇故旧之交

166 ◎君子持身之符

167 ◎不退之輪、常明之燈

168 ◎宜恕不可恕

169 ◎能脱俗便是奇

170 ◎自淡而濃、自嚴而寬

171 ◎心虚則性現

172 ◎奉此義冠大帶

173 ◎為鼠常留飴

174 ◎心体便是天体

175 ◎惺々寂々

176 ◎議事者身在事外

177 ◎操履嚴明、心氣和易

178 ◎不近惡事不立善名

179 ◎天下無不入我陶冶中

180 ◎一念慈祥、寸心潔白

181 ◎只一個庸德庸行

182 ◎一耐字極有意味

183 ◎靠外物做人

184 ◎忙裡偷閒、鬧中取靜

185 ◎己心、人情、物力

186 ◎居官二語、居家二語

187 ◎富貴之地、少壯之時

188 ◎持身不可太皎潔

189 ◎小人有對頭、君子無私惠

190 ◎執理之病、義理之障

191 ◎磨礪当如百煉之金

192 ◎毋為小人所媚悅

193 ◎好利者、好名者

194 ◎刻之極、薄之尤

195 ◎讒夫毀士、媚子阿人

196 ◎山之高峻、水之湍急

197 ◎建功立業

198 ◎処世作事

199 ◎末路晚年、精神百倍

200 ◎鷹立如睡、虎行似病

201 ◎俟美德、讓懿行

202 ◎毋憂弘意

203 ◎飲宴之樂、声華之習

204 ◎以心肯処為樂

205 ◎切忌加一滴一掬

206 ◎冷眼、冷耳、冷情、冷心

207 ◎仁人心地寬舒

208 ◎聞惡不可就惡

209 ◎心和氣平、百福自集

210 ◎用人不宜刻

211 ◎風斜雨急処

212 ◎不開嫉妬門

213 ◎士大夫居官居鄉

214 ◎大人不可不畏

215 ◎怨尤自消、精神自奮

216 ◎不可乘喜而輕諾

217 ◎善讀書者、善觀物者

218 ◎天之戮民

219 ◎至人何思何慮

220 ◎口乃心之門

221 ◎責人者、責己者

222 ◎子弟者大人之胚胎

223 ◎君子處患難而不憂

224 ◎桃李何如松蒼栢翠

225 ◎風怡浪靜、味淡声希

後集 目次

- 1 ◎厭名利之談／2 ◎無能之全真／3 ◎乾坤之幻境／4 ◎歲月本長／5 ◎煙霞具足／
6 ◎夢中夢、身外身／7 ◎伝心訣、見道文／8 ◎不讀無字書／9 ◎心無物欲／10 ◎奈
何不早回頭／11 ◎個中趣、眼前機／12 ◎塵中塵、影外影／13 ◎蝸牛角上／14 ◎不免墮
落頑空／15 ◎當下休了／16 ◎從冷觀熱／17 ◎浮雲富貴之風／18 ◎身心兩自在／19 ◎一
念寸心／20 ◎烏有先生、白衣童子／21 ◎仙境凡境、生機殺機／22 ◎趨炎附勢之禍／
23 ◎松澗竹窓／24 ◎消幻業長道心／25 ◎爭先的徑路窄／26 ◎忙處不乱性／27 ◎無榮辱
無炎涼／28 ◎身心安樂／29 ◎進步退步、着手放手／30 ◎貪得者、知足者／31 ◎矜名練
事／32 ◎無喧寂無榮枯／33 ◎靜躁兩不相干／34 ◎悠長之趣、惆悵之懷／35 ◎禪宗詩旨
／36 ◎水流境無聲／37 ◎欲界是仙都／38 ◎昏明頓異／39 ◎離了万丈紅塵／40 ◎袞冕行
中一段高風／41 ◎出世之道、了心之功／42 ◎此身閒處、此心靜中／43 ◎恍似雲中世界／
44 ◎不希榮、不競進／45 ◎塵心息、俗氣消／46 ◎春日秋日／47 ◎一字不識有詩意／
48 ◎觸處見真機／49 ◎不繫之舟、既灰之木／50 ◎形氣用事、性天視之／51 ◎任幻形之彫
謝／52 ◎欲其中者／53 ◎不如貧之無慮／54 ◎讀易談經／55 ◎盆內花、籠中鳥／56 ◎認
得我字太真／57 ◎自老視少、自瘁視榮／58 ◎人情世態倏忽萬端／59 ◎一冷眼一熱心／
60 ◎安樂的窩巢／61 ◎物我兩忘／62 ◎成敗生死／63 ◎身心何等自在／64 ◎靜裡聽來／
65 ◎人心難降難滿／66 ◎心地上無風濤／67 ◎自適其性／68 ◎魚忘水、鳥不知風／69 ◎

盛衰何常／70◎飛蛾鷗鴟／71◎不了禪師／72◎冷眼冷情／73◎聖境自臻／74◎眼前一段空明／75◎詩思野興／76◎伏久者飛必高／77◎樹木歸根、人事蓋棺／78◎狗欲是苦、絕欲亦是苦／79◎烈士讓千乘／80◎只是點頭／81◎現在的隨緣／82◎物出天然見真機／83◎性天澄徹／84◎人心有個真境／85◎雖雅不離俗／86◎以道眼觀／87◎人生澹泊之真／88◎纏脫只在自心／89◎斗室中萬慮都捐／90◎機神最宜觸發／91◎櫛柄在手、收放自如／92◎造化人心／93◎一拙字有無限意味／94◎一毛便生纏縛／95◎理寂則事寂／96◎幽人清事在自適／97◎未生之前、既死之後／98◎貪生知死之因／99◎優人奕者／100◎靜者閒者／101◎人生第一個境界／102◎心無其心／103◎俗士沈身苦海／104◎養吾円機／105◎喜寂厭喧者／106◎山居胸次清洒／107◎興逐時來、景与心会／108◎福境禍区／109◎繩鋸木斷、水滴石穿／110◎月到風來／111◎生生之意常為主／112◎雨余山色、靜夜鐘聲／113◎曠遠清邁／114◎心曠心隘／115◎塵情即是理境／116◎就一身了一身者／117◎身心之憂、風月之趣／118◎澄然靜坐／119◎順逆一視欣戚兩忘／120◎是非俱謝、物我兩忘／121◎自塵苦其心／122◎花半開酒微醉／123◎山肴野禽／124◎口耳頑空／125◎山林之士、農野之夫／126◎非分之福、無故之獲／127◎人生原是一傀儡／128◎以無事為福／129◎姪邪之淵藪／130◎心要超事外／131◎減省一分超脫一分／132◎人心冰炭難去／133◎可匹嵇阮／134◎渡海的浮囊

凡例

一、本書の底本は、加藤咄堂講述『修養大講座・第四卷（菜根譚前集、從政名言・上、克己銘）』（昭和十五年十二月二十五日発行、平凡社刊）中の「菜根譚前集」の部分である。

一、「味読精読菜根譚前集（処世交際の道）」の書名は本書刊行所によるものである。

一、底本は旧字体漢字・旧仮名遣いであるが、本書では原則的に新字体漢字・現代仮名遣いに置き換えた（但し、〈間〉の旧字ないし正字である〈間〉が〈閑〉に通じるものである場合などの例外がある）。漢字と仮名の置き換えは原則的にしていない。また、漢字異体字の使用は底本のままとした。

一、踊り字（ゝゞ、ゞくゞ々）は、現在もよく使われる「々」以外は不使用とした。

一、句読点は、現在の感覚で読みやすいようにいくらか加減し、送り仮名もいくらか加減した。但し、語義・ニュアンスを一意的に定めがたい場合は、送り仮名の加減は避けた（例・集つて↓あつまつて／つどつて／たかつて）。

一、講解本文部分については、読み仮名（ルビ）を適宜補った。

一、底本は、返点付き原文↓書き下し文↓講解の順に組まれているが、本書では、書き下し文↓返点付き原文↓講解の順に組んだ。

一、〈 〉括りの注と（ ）括りのルビ、および 〈 〉の括弧は本書刊行所が便宜的に付加したものである。〈 〉の括弧処理は傍点付加と同じ意味合いである。原文で傍点が使われているので区別のために 〈 〉を使用した。

一、基督、希臘などの外来語当て字は現在代表的な片仮名表記に置き換えた。

一、底本使用の鉤括弧は『 』であるが、これは全て「」に置き換えた。

一、「ママ」のルビ注記（原文のままの意）は通例による。

序 説

一、「菜根譚」の思想と文章

人類は長い長い年月、東西背中合わせに、其の文化を發達せしめました。すなわち一は印度洋から太平洋に向かい、他は地中海より大西洋に向かい、其の太平洋に向かえるものは東洋文化となり、其の大西洋に向かえるものは西洋文化となり、おのおの其の思想色彩を異にいたしました。

素より同一人類の創造に成る文化でありますから、東西共通の点も少なくないのであります。西洋、特に近代西洋の文化は実験と觀察とを旨とし、広く客觀的に且つ実用的に進歩したに対し、東洋は古來聖賢の教えに遵拠し、専ら内觀と反省とを事とし、深く主觀的に且つ思索的に開展いたしました。これ、西洋の物質的に傾き、東洋の精神的に偏するといわゆる所以であります。これが又、修養を語るに於て東洋思想が西洋思想よりも奥深きものを有する所以であります。

云うまでもなく、修養を主とする本講座は其の内觀と反省とを主とし、深く心靈の泉を掘り下げて心裏の靈光に触れんとする東洋思想を中心としてお話し申すのであります。其の東洋思想共通の主流をなして居る思想は、印度の仏教であり、支那の儒教であり、道教であります。三教おのの異彩を放ち、時に相反撥することを免れませなんだが、他面に於ては夙く融合の方途を辿り、漢魏六朝の昔、既に渾然として相容るるの傾向を示し、特に禪の渡来と共に儒士文人の之れを愛好す

るもの多く、隋唐の時代に入つて天台、華嚴、法相等、大乘の仏教大いに其の哲理を顕揚し、其の間、三教融合の思想的根柢も亦た漸く築かれんとし、宋に入つて仏教哲学の影響掩うべからざる宋儒性理の学説となり、儒教大いに振い、元を経て明に入つて三教おのおの門戸を張り、他を排斥する如きも、一脈共通する思想的色彩は明末清初に於ける所謂清言者流に現われ、断片的なる随感随録の中、世を警め人を動かすの箴言、此の間に迸り、ここに東洋思想の精髓が発揚せられて居りますので、「菜根譚」の如きは其の最も顯著なるものであります。

此の意味に於て「菜根譚」は、東洋思想の結晶であります。巧みに三教の思想を融合し、之を自家葉籠中のものとして表現せられて居りますので、其の文章が典雅であり、流麗であり、簡潔であり、警拔であり、語、簡にして意深く、言、短くして氣鋭く、宛然寸鉄人を刺すが如く、慄然として自粛せしむると共に、又朗々として誦すべき詩であり歌であります。

「菜根譚」は又、此の文章に於ても亦た巧みに東洋的思想の發揮せられたるを見るので、私の乏しき経験によりますと、西洋文章の特色は精細なる客観的描写にあり、周到なる論理的解説にありまして、微に入り細を穿ち、理路整然、説述亦た頗る明晰なる点にありまして、東洋の文章の特色とする、語少なくして含蓄多く、主観的に言外の意を味わしめんとする点ではありません。蓋し表現の外に意を寓するのは東洋芸術の特色とする所で、これは独り文章のみならず、絵画其の他の芸術に於ても見得る現象で、特に禅画といい、俳画といわるるものの如き、稚拙の処に雅致を存し、落筆以外に興趣を味わしむるは到底西洋芸術に於て見るべからざる趣を有して居りますの

で、今、此の「菜根譚」の文章は実に能く其の特色を發揮した最も東洋的なものであるべきであります。

二、「菜根譚」の書名と著者

題して菜根という、菜は野菜の葉、根は野菜の根でありますから、大根、蕪とかいうような粗末な食物を指したもので、譚はハナシでありますから、直に此の書名を見て野菜類の講釈をして八百屋や青物屋の本のように速断する人がありますが、此の書名は昔、宋の時代の儒者汪信民（名は革）という人が、

人、常に菜根を咬み得ば、百事做すべし。

というた語に基きましたので、凡そ人間が贅沢な美味を求むるなく、大根や蕪のような粗末な食物に甘んじて居るようであれば、何事も成就するものであるとの意であります。同時代に居られた建安の安国侯（字は康侯）が此の語を聞いて非常に激賞せられ、有名なる宋儒朱子は深く此の語を愛し、其の著「小学」外篇の末尾に、特に此の語を加えましたほどで、爾来頗る此の語が喧伝せられて、羅大経という人の「鶴林玉露」に真西山が此の菜根を論じて、

百姓、一日も此の色あるべからず。士大夫、一日も此の味を知らざるべからず。
と申しましたのに対し、

余は謂う、百姓の此の色ある。士大夫の此の味を知らざるに縁る。

と申して居ります。百姓に一日も青菜のような餓え疲れた色あらしめてはならぬが、廟堂に立つて政治を執る士大夫には此の菜根の味を知らしめねばならぬ。廟堂に立つ士大夫が此の味を知らないから百姓に此の色があるというので、菜根の二字、其の意が広く且つ深く、味は淡泊であるが咬みしめて頗る滋味があります。

これを書名として著わされた人は、明の洪自誠、還初道人と号したのでありますが、不幸にして其の伝が明らかでないので、日本に於て初めて此の書を翻訳せられた加賀の儒者、林瑜——通称は瑜、字は孚尹——が其の序文に、

未だ洪子の如何なる人なるかを審つまびらかにせず、顧おもうに、必ず明季の間、隱退して人を樂しむものか。

とありまして、其の在世時代は、従来明の万曆年間の人であつたであろうと推定せられて居ります。それは、洪自誠の友人で此の書に題詞を書いた于孔兼が万曆八年に進士に及第して居り、又、明の天啓四年（皇紀二二八四）〔西曆一六二四年〕に上梓せられた陸紹衍（字は湘客）の著わしました「醉古堂劍掃」という書に「菜根譚」の中の語を引用せられて居りますので、天啓の前に泰昌——これは一年——其の前が万曆でこれが四十七年間も続いて居りますからでありますが、ここに一つの異聞があります。それは辱知細野南岳師（大阪寒山寺住職）曾かつて支那に遊び、福州の名刹、長慶寺の寺史を繙かれました時、其の中に、

福州長慶寺第三十六代願來禪師、法を広東海幢寺角子禪師に嗣ぎ、康熙五十年、当山に住持すること六載、著に「菜根譚」あり、世に行わる。

とあるを発見せられたことであります。これは確かに從來不明なりし「菜根譚」著者に対する一大発見であります。著者の生存時代といわるる万曆は先に申しましたように四十七年も続き、其の最後の年でも皇紀二千二百七十三年^マ（万曆四十七年^マ西曆一六一九年）であり、願來和尚の長慶寺に住せられたという康熙五十年は皇紀二千三百七十一年（西曆一七二一年）でありますから、万曆の末に生れて百二歳の寿を保って、漸く康熙五十年へと生存せられるのでありますから、四五^{しご}十歳で此の書を著わされたとすればどうしても百四五^{しご}十歳の長寿を保たれたとせねば寺史の記録と合致いたしません。これは恐らく寺史の年代に誤りがあつて康熙五年ではなかつたかとも思われます。勿論それにしても普通以上の長寿の人と見なければなりません。これならば兎に角^と肯かれますが、五十年とあるのは、何^どうあろうかと思われまゝす。更に又根本的に洪自誠と願來和尚と同一人なるや、抑も亦^そた寺史にいう所の「菜根譚」は洪自誠の「菜根譚」と同一書なるや、当時菜根の名、大に行われ、清に入つて劉子載の「吾家菜根譚」等がありますから、又別に願來和尚の「菜根譚」なるものがあるのではなかつたか、之れを判定すべき何等の材料もないのであります。寺史の年代に誤謬ありとすれば、初め禄仕して官途にあり、明末清初の際、世を遁れて禪に歸し、晩年長慶寺に住持せられたということをも其の思想の上よりも肯定せられるのであります。何^いれにいたしましても初めは官に

あり、後ち引退せられたという以外、其の詳細の伝記は知ることの出来ぬのでありますが、其の思想と人格とに就いては著者洪自誠の友人三峰主人于孔兼が此の書に題して、

其の性命を譚ずれば直に玄微に入り、人情を道えば岩険を曲尽し、天地に俯仰して胸次の夷猶を見、功名を塵芥にして、識趣の高遠を知る。筆底の陶鑄は緑樹青山にあらざるなく、口吻の化工は（いんげん）尽く是れ鳶飛び魚躍る。

といい、且（かつ）つ、

譚、菜根を以て名づく、固（もと）より清苦歴練の中より来たり、亦（また）た自ら栽培灌漑の裡より得（う）。

といい、其の学の深奥と人情の委曲を悉くし、其の思想の高遠にして文章の靈妙となると共に、ことごとく自己試練の中より得来たれるを説けるに於て察知することが出来ますので、我が林瑜も、

其の識見卓絶、固（もと）より尋常拘儒の言う所の若きにあらず。天理に基づきて而も人情に遠からず、徳行を尚（たつと）びて文雅を斥けず、之れを要するに人をして之れを中行に致さしめんと欲するなり。

とあるのを見ても想像せらるるのであります。

三、「菜根譚」の体裁と流布

其の思想の内容と文章の表現とは前に申しましたが、全卷三百五十九の短い文章から成つて居りますので、最も短きは十四字、長きも七十四字に過ぎず、各語多くは対句を成して朗々誦すべきも

のみであると申しても過言でないほどで、前後二集に分かれたれ、前集二百二十五、専ら処世の要諦を示し、治世産業に及び、後集百三十四、主として引退後の立言に関し修養の玄旨に入る。両集を通じて悉く一条毎に独立し、句々皆な吾人を啓発するものでないのではありません。

由来短き語句を以て玄旨を現わす文章は漢文の特色でありますが、明末清初に当たりまして、特に此の種の文体を以て随感随録的に表現せられたる所謂清言なるもの流行いたしまして、此の種の著書は頗る多いのでありますが、「菜根譚」一たび出まして、巍然、他と匹儔を異にして盛んに喧伝せられ、先きも申しました「醉古堂劍掃」「吾家菜根譚」初め、石天基の「聯瑾」「紳瑜」を初め其の著「伝家宝」に収められたるもの、悉く「菜根譚」的ならざるはない。此の「菜根譚」は清の康熙年間、早くも満洲語に翻訳せられ、それと多く年を距てずして朝鮮に於ては朝鮮文字たる諺文に訳したほどで——これらは現在我が国に行われて居ると章句に多少の増減があるということですが——其の広く東亜の天地に行われたのを知ることが出来るのであります。

其の我が国に伝来したのは其の年代を明らかにしませんが、彼の長慶寺の所在地たる福州の僧たる隠元禪師は我が承応三年（皇紀二三二四）（西暦一六五四年）我が日本へ帰化して黄檗宗を開かれて多くの書籍を将来せられ、爾来支那の名僧が續々渡来して禪書を持参して居りますから、それらの人々の手によって将来せられたか、或いは長崎へ来る商人其他の手によって輸入せられたかは明らかではありませんが、これが初めて日本に刊行せられましたのは、先きにも申しました加賀の儒者林氏によって、文政五年（皇紀二四八二）（西暦一八三三年）に上梓して同志に頒たれたので、それ以来

大いに行われ、幕末には既に学者愛好の書となり、明治に入りましては多くの活字本が出版せられ、其の註釈や講話の類も亦た頗る多く、私も亦た再三之れを筆にし口にして居りますが、今は此の講座に於て大成結集せんとするのであります。

菜根譚

前集

1 ◎ 棲守道德

道德に棲守する者は、一時に寂寞たり。権勢に依阿する者は、万古に
淒涼たり。達人は物外の物を観、身後の身を思う。寧ろ一時の寂寞を
受くるも、万古の淒涼を取るに母れ。

棲^二守道德^一者。寂^二寞一時^一。依^二阿權勢^一者。淒^二涼萬古^一。達人觀^二物外之物^一。思
^二身後之身^一。寧^レ受^二一時之寂寞^一。毋^レ取^二萬古之淒涼^一。

劈頭第一に此の語を載せられたのは頗る意義が深いので、道德とは人の天より受け得たる心の本性たる徳を行うので、「論語」には「道に志し徳に拠る」とありまして、人の人たる心を以て人の人たる道を行うのでありますが、道德を守つて之を棲み家として安んじて居るものは、世には知られず、人にはもちいられず、流離困頓、貧苦の中に生涯をおくらねばならぬのであるから、これを一時に寂寞たりというたので、之れを古聖に見ましても、孔子は席煖かなるに暇なく、道を説き

ながら幾度か餓死せんとする困難に遇い、伯夷はくい叔齊しゅせいは周の粟を食うを潔しとせずして首陽の山にわらび薇を採つて終に餓死するに至り、ソクラテースは道のために牢獄に投ぜられて毒殺せられ、キリスいやしトは道のために十字架上の露と消えて居ります。これらの大聖や哲人ばかりではなく、苟くも道を守つて一步も譲らざるものの迫害に遇い困苦に沈むは其の例に乏しからぬことで、志士仁人は其の為に幾多の辛苦を嘗めた例は少なくないので、よしこれらの困難なしといたしましても、一時に寂寞たることは免かれないが、其の道は万古に伝わり、其の行いは、後人の手本となつて、其の人死んでも其の道は亡ぶるものではないのであります。

之れに反して権威や勢力におもね阿り付くものは世にも用いられ、人にも貴ばれ花やかに見えますが、それは其の時限りで、後の世になれば誰れも知るものはなく淒涼と、荒れ果てたさびしい姿となる。されば達人即ち天地の道理に通達した人は唯だ目の前に立派に見える金銀財宝や、位階爵禄に目をつけずして、これら以外のものを見ます。何故かといえは金銀や財宝は使えば減る。位階爵禄も何時までも保てるものではないからであります。よし生涯、金銀財宝の中に埋もれ無上の位階爵禄を受けたからとて、死んでもうては持つて行くことが出来ず、妻子も珍宝も位階も命終る時には随うものではなく、赤裸で生れて赤裸で死ぬ。財宝も消え、此の身も消ゆ。これで万物の霊長たる資格が何処にあるといえるのでしょうか。

一体此の世の中で人の尤も大切とするのは何であるかといえは、俗物共は直に金銀財宝というでしょう。成程、今の世は黄金万能の世、金銭全盛の世であります。しかし人には金より大事なもの

はないか、抑も復た何の爲めに金が欲しいのであるか、それは金がなければ思うことも行われぬから、否、金がなければ食うことが出来ないからといひましょう。成程、金は大事である。しかし其の金を大事とするのも詮じつめる所は命が大事だからでありましょう。命は金より大事だ。併し其の命も時々刻々死の方に近づく、まことや西人の謳いし如く、人間の呼吸は墳墓に趣く進軍の曲だ、トントコトントコと吾等は此の借しむべき命を減らして居るので、命とて頼むに足るものではない。人間には此の命より大事なものがあるのである。それは何か、云うまでもなく道である。道の爲めには命を鴻毛より軽しとするのが人の行い、志士仁人は其の爲めに身をさえ棄てる。此の道を守ることを忘れて徒らに利禄に走り権勢に趣いて抑も何をしようとするのか、半生の苦節、利禄の爲めに失われ、十年の清名、権勢の爲めに亡ぼされ、たとい一時は赫灼たるかくしゃくことがあつても万古に淒涼たらざるを得ないのであります。されば達人は物外の物を観、身後の身を思つて物外の物を見るが故に利禄や権勢に惑わず、身後の名を思うが故に生前の貧困を辞せず。清節の士の取るべき所は全くここにありまして、彼の一時の寂寞を憂いて万古の淒涼を取る如きものは大丈夫の断じて為さざる所であります。

人生僅か五十年、七十は古来稀なりといひますが、人間は一体此の五十年や七十年だけのものではなく、生れるまでには長い長い歴史を経て来たのであり、死んでから後も長い長い未来があるのであります。生前死後の問題は別としても、吾等が生れ来たった此の社会にも長き過去あり、長き未来があつて、吾等の生涯は無限の時間の中の一連鎖で、其の一挙一動は死と共に亡びずして長く

此の宇宙の上に印せらるるものでありますから、ただ現在の身だけを見て事を行うのは大なる誤りであります。手近い所で例を取れば楠正成の生涯は実に苦しいものであった、併し其の忠魂義魄はな今尚お生き生きとして万古に赫灼かくしゃくして居るが、彼の一時権勢を弄した足利尊氏は誰れ一人祭るものなき淒涼を取つて居るのであります。

肉に死しても霊には生きられる。個人に死んでも社会には生きられる。大丈夫眼中死生なし、唯だ道あるのみであります。此の道に棲守するときは黄金万鎰いづ〔鎰。昔の金の重量単位〕前にありとも其の節を変ぜず、白刃頭上いへんに下ると雖も従容として死に就くことが出来るので、人に貴ぶべきものは全くこれであります。権威赫々欧亜の天地に振うたアレキサンドル大帝が、乞食哲学者ディオゲネスを訪うた時、ディオゲネスは襤褸ぼろを着て家もなければ桶の中に住んで居つて、少しも大帝の権威に恐れず、大帝は、

「我れはアレキサンドルなり」

というに對し傲然として、

「我れはディオゲネスなり」

といい、大帝の其の需もとむる所を問うに對し、

「大帝の御出いでによつて日影になつた、今少し彼處かしこへよつて下され」

というたという話は、寂寞を守つて屈せざるディオゲネスの人格が思いやらるるのでありますが、さすがのアレキサンドルも嘆じていう。

「我れ若しアレキサンドルたらずんはディオゲネスたらん」

と、英雄首^{いゆうべ}を回らせば即ち神仙で、大帝の偉い所もここにありますが、其の大帝の雄図は今焉^{いず}くにあります。大帝の雄図も夢の如くに消えたがディオゲネスの思想は今尚^なお伝えられて居ります。私はここにも一時の寂寞を受くるも万古の淒涼を取る母^{なか}れというた語を味わうべき意義があるのではないかと思ひます。

2 ◎ 涉世浅点

世よをわた渉ることあさ浅ければてんせん点染も亦またあさ浅く、事ことをふ歴ることふか深ければきかい機械も亦またあさ浅し。故ゆえに君子くんしは其その練達れんたつならんよりは朴魯ぼくろなるに若しかず。其その曲謹きよくきんならんよりは疎狂そきやうなるに若しかず。

涉し世浅点染亦浅。歴れき事深機械亦深。故君子与二其練達一不し若二朴魯一。与二其曲謹一不し若二疎狂一。

これは処世上の訓言。世間を渉ることの浅いものは其の悪習に染むることも浅く、悪摺わるずれなどのこともなく生れたままで無邪気な所があるが、海に千年、山に千年と世の中を歴て来たものは機械とて小才が廻つて物事に如才なく口も利巧なれば行やることも気がきいて何をさしても役に立つが、人前ばかりを好くして油断も隙もあつたものではない。

されば君子は練達ならんよりは朴魯なるに如かずで、練達とて何事にも上手で抜け目のないものよりは質朴魯直で飾り気のなく馬鹿正直な方がましである。曲謹とて物事に叮嚀くさく、遠慮勝ちで人の前では口もようきかぬようになつつまやかなものよりは、疎狂とてあっさりとして思うたことは其儘に云い出す方がましだと云うのが此の語の主旨で、何にも朴魯がよいの疎狂がよいというのではありません。馬鹿正直よりは馬鹿でなくて正直なのがよく、疎狂なのよりは礼儀作法に合^おうたのがよいのでありますが、如才のないものには気の許せぬことがあり、謹しみ深いように見えるものには油断の出来ないものがありますから、其の外形に迷わずして其の心を察せねばならぬことを戒めたので、兎角凡人は其の形を見て其の心を見ず、口先の巧いのに釣り込まれて飛んだ失策を來たすことがあるのですから、多くの人を使うものなどの心得て置かねばならぬ金言と思います。

3 ◎ 君子心事

君子くんしの心事しんじは天青てんあおく日白ひしろく、人ひとをして知しらざらしむべからず。君子くんしの才華さいかは玉包たまつつまれ珠藏たまかくる。人ひとをして知しり易やすからしむべからず。

君子之心事。天青日白。不レ可レ使二人一不レ知。君子之才華。玉包珠藏。不レ可レ使二人一易レ知。

君子即ち人格の高い立派な人の心事は、天青く日白くて、所謂いわゆる青天白日、一点の雲なく、何所か
ら見ても明らかに見えて、少しも藏かくす所のないように公明正大でなければならぬこと、明治天皇の
御製に、

あさみとり澄みわたりたる大空の

広きをおのが心ともがな

と仰せられてあるようにせねばならぬのであります。何所から見られても恥ずかしくないようにす
る、言行忠信表裏相応、其の心に裏もなければ表もなく、八面玲瓏、人に与えて見せしむるよう

せねばならぬのであります。われわれの心は果たして八面玲瓏、人に見せしめられるか、誰には内証、彼れには秘密、裏もあれば表もあるようではなからうか。

君子の心事はかく公明正大、人をして知らざらしむべからずですが、其の才華は玉裏つつまれ珠蔵かくれて崑山の石が珠玉を蔵して、しかも外面に現われて居らぬように深く蔵して現わさぬようにせねばならぬ。あまり才華が現れると奥床しい所はなく、浅臺に見える。

そこひなき淵やはさわぐ山川の

浅き瀬にこそ仇波は立て

で、一碧おう泓としたる深淵は表面は静かにして仇波はたたぬものであります。されば心事は知り易からしめねばならぬが、才華は知り易からしめざるようにせねばならぬのであります。

4 ◎ 勢利紛華

勢利せいり紛華ふんかは近ちかづかざる者ものを潔きよしと為なす、之これに近ちかづきて而しかして染そまざる者もの、尤もも潔きよしと為なす。智械機巧ちかいきこうは知しらざる者ものを高たかしと為なす。之これを知しりて而しかして用もちいざる者ものを尤もも高たかしと為なす。

勢利紛華。不レ近者為レ潔。近レ之而不レ染者為二尤潔一。智械機巧。不レ知者為レ高。知レ之而不レ用者為二尤高一。

勢利せいりというは勢力や名利、紛華ふんかの紛まじは乱なり緩ゆるなりで、乱れ緩む、又結なり雜まじなりとあつて結ばれ雜まじる。華は榮華で、即ち榮華紛々たる所は行いを汚し徳を損じ易い所であるから、之れに近ちかづかないのを以て潔白とするが、之れに近ちかづいても其の汚れに染まないので尤もも潔白であるとするといふので、

坐禅せば四条五条の橋の上

往來の人を深山木に見て

で、誘惑の多い所を避けて深山幽谷で坐禅するのも結構だが、それよりも誘惑多き四条五条の橋の上、権力あるものも通れば美人も通る、其の間にあって心を乱さぬのでなければ、充分に修養の出来た人とは云われないというのであります。昔ディオゲネスはしばしば遊里の中に入出して居つたのを或る人が咎めて、哲学者と云わるものはそんな所へ出入すべきものでないという、ディオゲネスは平気で、太陽は能く埃溜を照らすではないかという話があります。勢利に近づかないのは潔白ではありますが、近づいても染まらぬに至っては更に一段上等であります。

智械機巧ちかいきこうというのは智恵や才氣の遣り繰り、即ち権謀術数、こんなことは知らないのを以て氣高いとはいいますが、知つても用いないのは更に氣高いのであるとの意。知らないのは結構ですが、コンナ連中は知つたら用いることがないとは限らぬのでありますから、知つて用いない所に尤も高尚な心掛を見ることが出来るといふのです。

5 ◎ 逆耳之言

耳中常に耳に逆うの言を聞き、心中常に心に払ふの事あれば、纔にこれ進徳修行的の砥石なり。若し言言耳を悦ばし、事事心を快にせば、便ち此の生を把て鳩毒の中に埋在す。

耳中常聞ニ逆レ耳之言一。心中常有ニ払レ心之事一。纔是進徳修行的砥石。若言言悦レ耳。事事快レ心。便把ニ此生一埋ニ在鳩毒中一矣。

常に耳に聞く所のものは、耳に逆う、俗にいう耳が痛い忠告諫言、「良薬は口に苦く」「忠言は耳に逆う」で、聞いて愉快のものではなく、心に払ふとは氣に入らぬものであるが、心中常に此の氣に入らぬことあつて初めて我が足らざるを補ひ我が欠けたるを足して行くことが出来るのでありますから、之れは我が徳を進め行いを修めてゆく砥石のようなものであるが、之れに反して耳に聞く所は追従輕薄、何事を云うてもハイハイ、ハイハイ、心の任ならぬはないという風では徳を磨く

ことも出来ねば行いを正すことも出来ず、一生涯を鳩毒ちんどくとて、身を毒藥の中に埋めてしまうようなものであります。鳩は鳥の名で、其の鳥の羽で酒杯の上をさすれば人を殺すの力があるというほどのもので、これを鳩毒ちんどくというのです。

豊臣秀吉は随分性急であつたが、又能く人言を容れるの量を持つて居つた人であります。此の秀吉が小田原北条攻めの時、長の対陣に退屈して大阪より能役者を招いて陣中に酒宴を張つて居ると、浮田中納言秀家の客臣たる花房某が其の門前に大言をあげて、

「長々の対陣、さなきだに『そうでなくてさえ』兵士の元氣の沮喪して居るのに大将たるものが能狂言なぞをやらして居るとは以ての外の義だ」

という、秀吉聞き咎とがめて浮田秀家に命じて、

「家來の身を以て我を非難致す無礼な奴、磔刑に処せよ」

と命じた、秀家仕方なく御請をして下ろうとすると、秀吉少し考えて、

「あの者の申すことも一応道理とも思われる、磔刑は不憫である、切腹申しつけよ」という、秀家有難しと御請けをして下ろうとすると又呼び止めて、

「待て待て、今我は三軍の將として此の地に臨み、誰一人我を非難するものなきに、かくも立派に言いのける段、神妙の義、切腹には及ばぬ、褒美をとらせよ」

というたという話があります。秀吉の偉い所は全くここにあるので、耳に逆さかうの言を聞きて我が徳を磨き、心に払もる事あつて我が心の錆さびを取る。ただ阿諛諂佞あゆへんねいを喜べば、終ついに身を亡ぼすは古來其の

例に乏しくないのであります。

会津の保科侯が山崎闇齋に「汝の楽しみとする所何か」と問われた時、闇齋は、

我れに三樂あり、万物の靈たる人に生れたる其の一、有文の世に生れて書を読み道を学ぶことを得る其の二、而して第三の樂はこれ楽しみもつとの尤も大なるもの、幸に卑賤に生れて侯家に生れざるしかこと、これなり。

と答えました。保科侯が怪みて其の故を問われると「今の諸侯は深宮の中に生れ、婦人の手に長じ、臣たるものは主意を迎合し、其の為なす所は之を賞な譽し、其の為なさざる所は之れを誹謗し、遂に本然の性を消亡せしむ、彼の卑賤に生れ幼にして辛苦を嘗なめ、長じて事務に習い、師教え友助け以て智恵を増すものに比して其の樂如何ぞや、これ臣の侯家に生れざるを以て樂の尤も大なるものと為なす所以なり」というたのも、此の理を示したのであります。

6 ◎ 疾風怒雨

疾風怒雨しつぷうどうには禽鳥きんちようも戚戚せきせきたり、霽日光風せいじつこうふうには草木そうもくも欣欣きんきんたり。見るべし、天地てんち一日も和氣わきなかるべからず。人心じんしん一日も喜神きしんなかるべからず。

疾風怒雨。禽鳥戚戚。霽日光風。草木欣欣。可レ見天地不レ可三一日無二和氣一。人心不レ可三一日無二喜神一。

疾風怒雨とて暴風雨の時は、鳥も戚々せきせきと悲しげにして居るが、霽日光風せいじつとて天氣晴れ渡りて風も穏かなる時は、心なき草木も欣々と嬉しうにして居るものであります。これ自然の光景ですが、此の天地間には一日も此の和氣あいあい靄々として花笑い鳥謳う楽しき境涯がなくてはならぬと共に、人の心も亦また疾風怒雨と、心の波風立ち騒ぎ、世を怨み人を怒り、我見我慢を振り廻して居つては心の安んずる隙もなく、怒つて見れば天地皆な怒りの種となり、悲しんで望めば万物皆な悲しみの因た

らざるはないのであります。斯くては戚々^{せきせき}と悲しげに世を送らねばならぬが、霽日光風^{せいじつ}と、心を晴
れやかにもてば、見るもの聞くもの、心を楽しましめざるはないのですから一日も喜神なかるべか
らずで、喜はよろこぶ、神は心であります。此の和気あり、此の喜神あつて、夕顔棚の下涼み、貧
しき家庭にも団欒の楽しみはありますが、若し怒り通しては人の世に何の楽しみがありません。
此の社会は同情に結ばれ、人は慈仁の道に生くるので、相争^{あい}うことを知って相和^{あい}することを知らな
かったならば、社会は弱肉強食の戦場、人生は修羅の巷^{ちまた}となり了^{おわ}るのであります。

7 ◎ 醴肥辛甘非真味

醴肥辛甘は真味に非ず、真味は只だこれ淡。神奇卓異は至人に非ず、
至人は只だこれ常。

醴肥辛甘非二真味一。真味只是淡。神奇卓異非二至人一。至人只是常。

醴は濃い酒、肥は肥えた肉、辛は山椒や胡椒の如き辛らきもの、甘は砂糖の如き甘いもの、これらが決して真の味ではない。其の証拠には毎日々々こんなものを食つて居つては嫌になるが、醴でもなく肥でもなく辛でも甘でもない米の飯は毎日々々食つても飽くということがない、此の淡泊なるものが真の味というもの、神奇とていろいろな不思議なことをしたり、卓異とて世人に卓に異なつたことをするものが至極の人というのではない、至人は只だこれ常で、別段何処というて異なつた所のなく、尋常の人のやるようにやつて行く所にあるという意で、意は平凡なようだが此の中には真の味もあれば至人の道もある訓言であります。

かく云えばとて眞の味は無味でもなければ、至人は常人ではないのであります。無味でもなく常人でもないが、別段異なつた所があるのではないのであります。彼の醴肥辛甘の如く異なつた所のあるものはチョット人の氣にはつきますが、もともと一方に偏して居るので、長持ちのするものではありません。古人も、

眞忠は忠を忘る念々これ忠、眞孝は孝を忘る念々これ孝。

といわれた如く、忠義といい孝行というても別段のことがあるのではない、日常の行動、即ちこれ忠孝とならねばならぬが如く、至人の行動は尋常の所にあつて、しかも、そこに価値がありますので、一見平々凡々何の奇抜な所もないようですが、それがなかなかむつかしいので、兎角とかく奇抜なことは人を喜ばしますが、これは至人の行いではないのであります。「徒然草」に、

為兼大納言入道、東寺の門に雨宿せられたりけるに、かたわものども集り居たるが、手も足もねじゆがみうちかえりていづくも、不具に異様なるを見て、とりとりにたぐひなくせものなり、尤も愛するに足れりと思いて、まもり給いけるほどにやがて其の興つきて、見にくくいふもつとせくおぼえければ、ただすなおにめずらしからぬものにはしかずと思いて、かえりて後、この間植木を好みて異ように曲折あるをもとめて、目を喜ばしつるは、かのかたわものを愛するなりけりとして興なく覚えければ、鉢に植えられける木どもみな棄てられにけり、さもありぬべきことなり。

とあるのは、此の道理を説明したものと見る事が出来る。

昔、僧あり、趙州に問う、「如何なるかこれ道」と、州いう「平常心これ道」と、平常の心これ道なるを以て心の欲する所に従いて矩を踰^{のり}えざる至人の妙行と一致することが出来るので、道元禪師の歌に、

水鳥の往くも還るもあとたえて

されども道は忘れざりけり

とありますが、ここに至人の至人たる所はあるので、醗肥辛甘は味の偏せるもの、神奇卓異も亦^また人の偏せるものたるを免れないのであります。

8 ◎ 天地寂然

天地は寂然不動なり、而して氣機は息むこと無く、停ること少し。
日月は昼夜奔馳す、而して貞明は万古不易なり。故に君子は閒時に
喫緊の心思あるを要し、忙処に悠閒の趣味有るを要す。

天地寂然不動。而氣機無息少停。日月昼夜奔馳。而貞明万古不易。故君子閒時要
有二喫緊の心思。忙処要有二悠閒の趣味。

天高く地広く、寂然と静かにじつとして動きませんが、天地の氣機、即ち其のはたらきはしばらくも息（やすむ）ることはなく、悠然として波に浮ぶ水鳥の動かざるが如くにして、足に少しの隙なきが如く、静中に動あるは天地の姿、日々は東より昇り、夜々月は西に沈み、昼夜奔馳と走り廻つて休むときはない。所謂天行は健なるものでありますが、貞明——貞は貞操の貞の字で易ることなきの義——と始絡易ることなき光明は万古不易、堯の時の日も舜の時の月も、平清盛が其の西に沈むを

止めんとした時の日も、天文学者が其の状態を観測しつつある今の月も其の光は易り^{かわ}ないので、動中静あるも亦^また天地の姿で、静中動あり、動中静あり。

静さや水に椿の落ちる音

これ静中の動。

白露をこぼさぬ萩のうねりかな

これ動中の静であります。されば君子たるものは亦^また此の天地の理を体し、閒時とて閑散無事な時にも、喫緊とてスワという時の心掛けがなければならぬし、忙^せ処とて忙^せわしき時にも悠閑的趣味とて、ゆったりとした所がなくてはなりません。即ち非常時たる喫緊時に平常時たる悠閑味を有し、悠閑時たる平常時に非常時たる喫緊味を忘れないようにせねばならぬのです。

清の石天基の語に——此の人のことは「新菜根譚」の節にお話いたします——〔この注釈は本書底本の講座他巻への言及〕、

獅子、兔を捉^なうる猶お象の如くす、是は象を捉^なうる猶お兔を捉^なうる如くなる所以なり。

というのがあります。象に向かうは喫緊的な非常時、これに兔に向かう平常時の如き悠閑味のありますのは、平常の兔を捉^なうる時に非常時の象を捉^なうる如き喫緊的覚悟があるからであります。

9 ◎ 独坐觀心

夜深く人静にして独り坐して心を觀じ、始めて妄窮りて而して真独り
露わるるを覺ゆ。毎に此の中に於て大機趣を得。既に真現じて而して
妄の逃れ難きを覺ゆ。又此の中に於て大慚慚を得。

夜深人静。独坐觀心。始覺二妄窮而真独露一。每於二此中一得二大機趣一。既覺二真現
而妄難一逃。又於二此中一得二大慚慚一。

夜深くして人静かに万籟寂たるの時、独り短檠たんけい（丈の低い灯火）の下に坐して吾、我が心を觀ずとい
う境地です。此の時には外界の心を動かすものなく、心海、波平らかに、見聞覺知する所の事物に
対して妄動する心は全く尽きて聖人君子と同じ真心が現われるのであります。真心とは妄動するこ
とのない心で、万人悉く其の心の奥底には存して居るのであります。常には見聞し覺知する事物
に動かされて行く妄心のみが騒ぎ廻りますが、今は夜深く人静かに見聞覺知の心を動かすものな

く、独朗の真心は露われるのであります。「大乘起信論」には真如と妄心との關係を論じ、われわれの持つて居る真如の妄心に動きかけるを内熏ないくんと云い、妄心の真如に向かうを外熏がいくんと云うてありますが、今は其の内熏の場合で、妄心の雲尽きて真如の月現われ八面玲瓏、月影の到らぬ限もなく、応用自在のはたらきが出来るのを、毎つねに此の中に於いて大機趣を得うというたので、さて此の真心の光明は立派に心の暗を照らしますが、其の妄心のなかなかに除き難きを思いますれば、ここに大慚ざん慚じんとして慚も忸も共にへはするゝの義で、恥はずずかしいという氣が起るものであるということです。しかし此の慚はずかしいと云う心が起るのは修養の上から申しますれば、之れが向上發展の動機で、これがないれば精神の修養が出来るものではないのであります。蓋けだし反省は改善の一步、慚もと忸は道を進むる順序で、此の反省といひ慚もと忸というのも、別段外から来るのでなく、其の本は自己を分裂して同じ自己の中に主觀と客觀とを立て、自己の行為を客觀化して見ますと、迷妄の雲漸ようく晴れて心裏の靈光が輝き渡り、自ら我を見て、

我が心池水にこそ似たりけれ

独り澄むこと定めなければ

と古人の詠まりましたように、我、我に恥はじることになるのでありますから、精神の修養には靜坐を主とするので、此の靜坐ぼとぼしによって真妄の心を見、ここに大機趣も得らるれば大慚ざん慚じんも得られ、大發展も大奮発もこれより進ほとぼしり出るのであります。

10 ◎ 恩裡生害

恩裡おんり由来ゆらい、害がいを生しょうず、故ゆえに快意かいの時とき、須すべらく早はやく首こうべを回めぐらすべし。
敗後はいご或あるは反かえて功こうを成なす、故ゆえに払心ほっしんの处ところ、便すなわち手てを放はなつこと莫なかれ。

恩裡由来生レ害。故快意時。須ニ早回レ首。敗後或反成レ功。故払心处。莫ニ便放レ手。

恩裡というは人から恩寵を受けて居る、得意ママの時代で、此の得意の時代ほど危険なことではない。「人を失敗させようと思えば之れを誉めるに限る」とまでいう人もあるほどで、調子に乗つてやると終ついに失敗に終るものであるから、快意の時、須すべらく早はやく首こうべを回めぐらすべしで、あまり調子のよくなつた時は、早く見切りをつけることが必要であります。

此の世をば我が世とぞ思ふ望月の

かけたることもなしと思えば

と謳^うった藤原氏全盛の時代は早や亡滅の兆の現われて居った時であり、平清盛得意の時は一門の榮華が夢の如くに消え行く初めであつたのであります。驕^こるものは久しからず、若^もし藤原氏が其の全盛時に首を回^こらし、平氏が得意の時に見切をつけたらば、其の亡滅を免^くることが出来たかも知れないのです。此の快意の時に首を回^こらすということは処世の指針とすべきことであります。

さて又其の反対に失敗の時かというと、敗後或いは反^{かえ}て功を成すとありまして、失敗に失敗を重ねつつ百折不撓の精神を以て進みます中に、終^{つい}に成功の域に到ることがないことはないのです、彼の徳川家康が生涯数度の戦争に敗けてばかり居つて、終^{つい}に天下を取ったのも其の一例とも見るこゝとが出来ますし、世の發明家が失敗に元氣を落とさずして一度より二度、二度より三度と終^{つい}に完成することの出来たのは、古今、其の例に乏しからぬ事実であります。されば払^ほ心^{しん}とて心に払^もる即ち失意の時といえども決して手を放つてしもうてはならぬ、少しの失敗にこれは駄目だなぞと廢^やめてしもうては成功を期することの出来るものではない。失敗は成功の母、断じて元氣を沮喪せしむべからずであります。

11◎藜口莧腸

藜口莧腸れいこうけんちようの者ものは氷清玉潔多し。ひようせいぎよくけつおほ衰衣玉食こんいぎよくしよくの者ものは婢膝奴顔ひしつどがんを甘あまず。けだ こころざし たんぱく もつ あきう蓋し志は澹泊を以て明かに、しか而して節は肥甘ひかんより喪うしなう。

藜口莧腸者。多二氷清玉潔一。衰衣玉食者。甘二婢膝奴顔一。蓋志以二澹泊一明。而節從二肥甘一喪也。

藜口莧腸れいこうけんちようというのは粗衣粗食のものをいうたので、藜はへあかざぐで野に生える草、莧はへひゆぐという野菜で共に貧賤のものの食うもので決して美味なものではありませんが、是等の食物を口にし、是等の野菜で腸を充たして居るものは、其の生活は疎末でも其の心は氷の如く清く玉の如く潔いが、衰衣こんいとて君主の着るような立派な着物、玉食とて結構なものばかり食って居るものの中には婢膝奴顔ひしつどがんとて、下女の膝をつき、下男の顔色を和らげて主人に追従する如くに他に対して阿諛あゆへんねいへんねい諂きたなする心の穢きたないものが多い。これというのは、藜口莧腸れいこうけんちようのものは名利の念がないから他に対して求むる所がない、他に対して求むる所がないから、人に媚びる必要もなければ世に阿おもねる要もな

い、貴人に会^あうても節を屈するに及^{およ}ばず、志は澹^{たん}泊^{ぱく}とあっさりして居れるが、衰^{こん}衣^い玉食^{じき}のものは名利^{うしな}を重しとするから丈夫の氣節は何処へやら失^うつてしまうものであります。此の事を節は肥甘より喪^ううというので、節は丈夫の氣節、肥は肥えたる肉、甘は口に美なるものであります。

12 ◎ 面前的田地

面前的めんげんてきの田地でんちは放はなち得えて寛ひろきを要ひとす。人ひとをして不平ふへいの歎たん無なからしめ、
身後しんごてき的けいたくの恵なが沢えは流えし得ひさて久ひさしきを要ようす。人ひとをして不ふ匱きの思おも有いらしむ。

面前めん的げんの田地てき。要二放一得寛。使三人無不二平一之歎一。身後しんご的てきの恵けい沢たく。要二流一得久。使三人有不二匱一之思一。

面前というは目の前、即ち現在のこと、田地というは心田のこと、心は地の種々のものを作り出すが如く、能く種々のことを生じますからこれを田というので、現在の心は寛大に開け放して人をして不平の歎なからしむるがよろしい。若し心が偏狭であれば人に愛憎の区別を生じて他人に不平を抱かしむるものでありますが、寛大であれば其の憂はないものであります。

身後的小の恵沢というは、死後に迄遺る恩恵徳沢、之は成るべく後世に永く伝わる様にして置くがよい。さすれば何時までも後の世の人が其の恩恵を受けて匱とほしきことがないが、これを思わずに唯だ目前の恩恵を施すことを知って永遠の恩恵を忘れてしまつては、後世をして徳沢に浴せしむるこ

とは出来ないものでありますから、眼前を見ずして身後を見よ、一時の計を立てずして永久の計を立てよというのであります。不^ふ匱^きは「詩経」に、

孝子は匱^{とほ}しからず。

といえるに出た語。兎^{とかく}角当世の人間は面前のこのみを計りて身後のことを忘れ、一時の計を立てて永久の計を忘れ、政治家は眼前の事を論じて国家百年の大計を立てず、会社の重役も就任中に利益を多くせんことをのみ苦心して永遠の信用を思わず、後は野となれ山となれの遣^やり方は実に人生の欠陥で、人をして永く匱^{とほ}しきを悲しましむる所以であります。

13 ◎ 涉世安樂法

徑路けいろ窄せまき処ところに一步いっぽを留とめて人ひとの行ゆくに与あたえ、滋味しみこま濃やかなる的てきは三分ぶんを減げんじて人ひとの嗜たしなむに譲ゆずる。此こは是これ世よを涉わたる一の極ごく安樂あんらく法ほうなり。

徑路窄處。留二步一与二人行一。滋味濃的。減三分一譲二人嗜一。此是涉世一極安樂法。

徑路窄せまき処とは山路の幅の狭い所、コンナ狭い所を大手を振って自分ばかり通ろうとしては人の害になる。又、人と並んで通ろうとすれば一方は断崖絶壁、一方は深淵に臨むというような山路であるから危険此の上もない。ソコで自分は一步踏み留まって人を先きへ通してやるようにする。これが世を渉るの極安樂の法であるといふのです。

老子に三宝として慈と儉と共に敢て天下の先を為なさずといふのを挙げて此の安樂法を提唱して居ります。沢庵禪師は之れを解して、

敢て天下の先を為さずとは天下に先立たずして謙るたとえなり。上よりの続きを以て云えば三に曰く譲といふべきを此処に至つて語勢を変えて長くかく云いたるにて一段面白し。

といわれて居ります。これに由りますと老子の三宝は慈と儉と譲で、一步を留めて人の行くに与うるは此の三宝を兼ねたるものと見る事が出来ます。

今一つの滋味濃的は三分を減じて人の嗜むに譲るとあるのも同じことで、食物の美なるものは我も人も食わんことを欲するものでありますが、これを自分ばかり食わずして三分は残して人に譲り与うるようにさえすれば世を渉るに安樂であるといふのであります。

武田信玄は処世の箴として、

誰も見よ滿ればやがてかく月の

十六夜の空や人の世の中

といいましたように滿れば虧ける世の慣い、此の滿るを避けて八分目にするのが世を渡る秘訣だと説くのであります。成程、驕るものは久しからず、一步を人に与え、三分を人に譲るのは世を渡る安樂法には相違ありませんが、併し何事もかく控目、譲り目にして不徹底な生活を営むということも亦た考えものであります。昔、三木摂津守の弟牛之助が其の兜に題して、

運は天にあり敵を見て退くなし

人はたださし出ぬこそよかりけれ

いくさにだにも魁はせず

と書いたのを、豊臣秀吉は笑つて、余よをして云わしめば、

人はたださし出いでたるこそよろしけれ

いくさのときも 魁さきがけをして

とするというたということもあります。安樂の法としては天下の先とならぬ老子の教えも結構であるが、志あるものは又天下に先さきだつの覚悟がなければならぬ。

14 ◎ 作人無高遠

人と作るには甚だ高遠の事業なし、俗情を擺脫し得れば便ち名流に入る。学を為すには甚だ増益の工夫無し、物累を減除し得れば、便ち聖境を超ゆ。

作人無^レ甚高遠事業^一。擺脫得俗情^一。便入^二名流^一。為^レ学無^二甚増益工夫^一。減^二除得物累^一。便超^二聖境^一。

人と作る^なというのは、人の中の人と仰がるる一代の名家とか千古の偉人とか云われるようになるには、別段高尚遠大な事業をするには及ばぬ。名誉だの利欲だのという俗情を擺脫^{はら}い去つてしまえばそれでよいのであるということです。成程それでよいのでありましょうが、それがなかなかむずかしいので、此の俗情の為に囚^なわれて為^なすべきことも為^なされず、為^なさねばならぬことも止めるものがあります。彼の^か西郷隆盛が、

命もいらぬ、名もいらぬ、官位もいらぬ、金もいらぬ人は仕末に困るなり。此の仕末に困る人
ならでは艱難を共にし、国家の大事を成すこと能わす。

というたのは此の俗情を擺脫した人でなければ大事は出来ぬことを見抜いたので、さすがに炯眼と
云わねばなりません。

学問をするにも、亦た何れも別段の才を増し智を益すような工夫をするには及ばぬ。唯だ外物の
為めに心を累わすわさるることを減じ除くことさえ出来れば立派に聖人の境涯に超え入ることが出来る
のであるということです。足代弘訓という学者は其の自警に、

- 一、人をあざむくために学問すべからざる事。
- 一、人とあらそうために学問すべからざる事。
- 一、人をそしるために学問すべからざる事。
- 一、人の邪魔する為に学問すべからざる事。
- 一、名を売るために学問すべからざる事。
- 一、利を貪むさぼるために学問すべからざる事。

とありますが、これ皆物累を減除し去って聖境に入る工夫を示したものであるというべきであります。

15 ◎ 俠氣素心

友^{とも}に交^{まじわ}るには須^{すべ}らく三^{さん}分の俠^き氣^{よう}を帶^おぶべし。人^{ひと}と作^なるには一^い点^{ってん}の素^そ心^{しん}を存^{ぞん}するを要^{よう}す。

交^レ友^レ須^レ三^三分^分俠^氣一^一。作^レ人^人要^要存^存二^二点^点素^素心^心一^一。

これは短いが面白い語です。朋友の交際には三分の俠氣とて、艱難を救い、弱きを助くるの男氣がなくてはならぬ、ただ利あれば合し害あれば去るといふ様な輕薄なのは真に友に交わるの道ではない。弱いものならよけて通る、強いものなら当たって砕ける俠氣の精神、男と見て頼まれては後へも退かぬ氣象あつてこそ頼もしき友と云われるのであります。人に交わるに此の俠氣がないものは、決して真の友人の得られるものではありません。

人と作^なるには一^い点^{ってん}の素^そ心^{しん}とて純潔にして物に染まぬウブな心がなければならぬ。もとより世に処^{おこ}し事^{こと}を行^{おこ}うて行く中には多くの人にも接し、さまざまな事にも遇いますが、其の爲めに我が心が染

まっぴゃく純粋な生れつきの心を失っては立派な人とは云われません。素心はこれ純情であり、偽らざる心であり、飾らざる心であります。

16 ◎ 寵利徳業

寵利ちようりは人の前ひとまえに居おること母れなか、徳業とくぎようは人の後しりえに落おつること母れなか。
受享じゆきようは分外ぶんがいに踰こゆること母れなか。修為しゅういは分中ぶんちゆうに減げんずること母れなか。

寵利母レ居二人前一。徳業母レ落二人後一。受享母レ踰二分外一。修為母レ減二分中一。

ちようり

寵利即ち寵栄利益に対する時は、たとえ他人から持ち上げられても、自ら進んで人の前に出るようなことをしてはならぬが、之れと反対に徳業とて道德の事業にはたとい人から妨げられるとも、進んで之れを実行し、人の後しりえにならぬようにせねばならぬ。享受とて、名誉とか利益を身に受けるという場合には、其の分限を踰こえぬようにし、これと反対に修為、即ち自分の為なすべき学問修行の場合には決して分限より引つ込んでならぬというので、「寵利は人の前に居ること母れなか」と云うのと「受享は分外に踰こゆること母れなか」と云う二句は身の分を守るべきことを示し、「徳業は人の後しりえに落つること母れなか」と「修為は分中に減なずること母れなか」、この二句は進歩の上で言うたのであります。古歌に、

人はただ身のほどを知れ草の葉の

露も重きは落つるなりけり

とある如く、身の程を忘れて人前に出しゃばり、或いは分限を踰こえて利益名誉等を得んとする人は必ず不測の禍を招き、遂に苦境に呻吟するようなことになるもので、彼の北条泰時が柵尾明恵上人とがのおみょうえの教えを受けて寡欲主義を取り、「あるべきようは」の七字を常に守り、勤儉、身を以て下を率い、よく太平の治を致したというのも之れが為めであります。

之れに反し修行の上では、之れだけで最早充分であると、一定の分限を守って、其れより引込むようでは到底何事も成功するものではありません。御子神典膳——此の人は後に小野次郎左衛門と改名して將軍の指南番になった人ですが、其の修行中、当時日本一と云われた伊藤一刀斎の所に参りました時、一刀斎は之れに教えて云うに、

「汝、唯だ油断すること勿なかれ、此の一事をよく守らば剣道修行は出来るものだ」と典膳が、

「其れ位のことは心得て居ります」

という、一刀斎、突然木刀を以て打ち下し、

「誰でも心得て居ると云いながら、現在わが木刀の下を脱だることの出来ないのは、是れ油断ある為めではないか」

といわれて、

「先生、其は乱暴で御座る、道場に臨んで身構えすれば決して油断はせぬものを」と云う。

「道場に於いて油断なきは何人なんびとも左様であるが、しかし剣道は平生何れの所に於いても油断なきに至らねばならぬ、汝、唯だ油断すること勿れなか」

と誡められました。それから是一刀齋、食事の時でも、或いは掃除の場合でも、或いは寝てるところなど、典膳の油断を見すましては木刀で「一本」と打ち込む。典膳はいつも打ち据えられて「参った」と云うて居りましたが、追々油断のないようになりました。或るとき一刀齋、静しずかに後に廻りヤツと打ち下しますと、典膳すかさず身をかわし、

「先生如何で御座る」

と言いました。身をかわすまでは油断がなかったが、「如何で御座る」というた時は既に油断。ソコを一刀齋、すかさず一本と打ち下し、

「汝、油断すること勿れなか」

と言つたという話があります。此が修行の肝心な所で、何事でも少し出来たという所に安んじて了しまえば真の成功は望まれません。身を持するに分限を守ることが大切なことであるが、学芸道德の習学修養の上では、一步も分限より引つ込んでならぬのであります。

17 ◎ 退歩即進歩

世よに処しよしては一步いっぽを譲ゆずるを高たかしと為なす。歩ほを退しりぞくるは即すなわち歩ほを進すすむる
的てきの張本ちやうほん、人ひとを待まつに一分いちぶを寛ゆるつするは是これ福さいわい、人ひとを利りするは実じつに
己おのれを利りする的てきの根基こんきなり。

処レ世讓二步一為レ高。退レ歩即進レ歩的張本。待レ人寬二一分一是福。利レ人実利レ己
的根基。

世渡りの道は徒らに人と先を争わずに一步を譲るにある。是れ自ら其の人格を高尙にする所以で、「歩を退しりぞくるは即ち歩を進むる的の張本」、張本は猶なお、立場という如きで、吾々が道を行くにしても、一步前にあれば一步は後にある。若もし両足を同時に進めんとせば遂に転倒を免れません。処世の道も其の通りで、常に一步を譲って出しゃばらぬが、却かえって自分を高尙にする立場となるものであります。鈴木正三しやうさんの歌に、

さし出^いづる鉾先折れよ物事に

おのが心を金つちにして

とあるように、われわれはむやみにさし出る我見我慢の心を打ち折る様にする修養が必要であります。若^もし徒らに人と先を争うて一步を譲ることを知らぬ者は所^{いわゆる}謂、

路傍^{むくげ}の木槿は馬に喰われけり

で、野の末、山の奥、人馬の通らぬ処に生えて居る草は喰われぬが、路傍に出しゃばつて居る木槿^{むくげ}は馬の餌食となる如く、自ら上らんと欲して却^{かえ}つて下り、自ら立たんと欲して却^{かえ}つて倒る様なことになるものであります。

次ぎの句は人の待遇上で、それにもあまり嚴格にせず、一分を寛^{ゆる}うして成るべく其の人に同情し、あまりに追窮することは避けたがよい。窮鼠却^{かえ}つて猫を喰むが如く、窮すれば濫し、濫すれば遂に此方に不為^{ふため}なことをするに至るものであるから、人を待遇するに一分を寛大にすることは、やがて自分の幸福を来たす所以となるのであります。何故かといえば人を利するということは、直に自己を利するので、他人を謗^{そし}れば他も亦^また自分を謗^{そし}る、人を善く云えば人も亦^また我を善く云うのは人情。人を利するは即ち自己を利する所以となるのであります。されば道元禪師も、

愚人^{おも}謂^{おも}わくは利他を先とせば自らが利省^{はぶ}かれぬべしと、爾^{しか}には非ざるなり。利行は一法なり、普く自他を利するなり。